

戦時下に描かれた絵画(2)

- 「弾痕光華門外」 - 画家たちの描いた激戦のモチーフを知る

追記 / 研究後記として

Tokyo Conservation
株式会社ディヴォート

「弾痕光華門外」の X 線画像に関する所見

東京文化財研究所のご協力を得る事ができ、文化財保存修復学会の発表後になってしまったが、ようやく X 線の撮影に漕ぎ着くことができた。X 線画像を観てみると、予想していた通り、富士山の画像が現れた。しかし、このようにはっきりと下層の描画状況が現れる事も常ではない。このキャンバスに描かれた富士は、制作途上というよりは、かなり完成された描画であるように観える。しっかり描いていたからこそ、X 線でこのように明瞭に現れたという事も言えるだろう。また鉛白をはじめとする X 線を吸収しやすい性質の絵具が用いられていたという事もあるのではないか。弾痕光華門外は、この「富士」の描かれたキャンバスに、これを描いた同じ作家の手によって描かれたと考えるのが妥当なのか。筆触や、描画状態を観ると、同じ作家であると言えなくもない。しかし、必ずしも下層の富士が、「弾痕光華門外」を描いた作家の手によるものであるかどうか断定はできない。いずれにしても、しっかりと描写した風景画の上に、手早く表現された作品であり、その制作された時期が絵画材料も豊富に手に入る状況ではなかったと考えるのが自然であれば、いわゆる古キャン(使用済みのキャンバス)を現場で使用したと考えても不自然ではないだろう。

研究後記：(文化財保存修復学会にて言及できなかったこと)

研究発表の直前に私の手元に流れて来た資料には、光華門を訪れる日本人の遺族と思しき人映る写真があり塔婆をあげ、供養する様子を記録した写真だった。それまでは、絵の中に表現された門の先の隧道の上に描かれた物が何であったかは不明であったが、この写真の出現により、供養の為の塔婆、墓標であった事が明らかになった。激戦のあとの、南京のある日の夕刻、城門の向こうから差し込んで来る夕日に伸びた供養塔婆の長い影と、往来する人々。それに対比して残る生々しい弾痕の傷跡を描写した物悲しい風景画というのが率直なこの作品の感想となった。戦争の士気をあおるものでもなく、単なる戦争の記録でもない、激戦後の空しい風景を表現した、純粋な絵画表現と捉えることも出来る。しかし、この絵の中には多くの歴史の材料や状況が一瞬のうちに表現され、古いキャンバスまで用いて画家たちが様々な思いの中で描いた戦時下での貴重な記録だ。誰が描いたかを追求する興味を超えた、昭和の文化財「戦時下」の「生き証人」と言っているのではないかと。

最後に

これらの研究をするにあたり、多くの方々のアドバイスや、お話を頂きながら進めてきたことを最後に記したい。まずは戦争絵画の研究のみならず、多くの作品の調査に積極的にご協力いただきました住友資料館館長の住友慎一氏に感謝申し上げます。この住友氏のコレクションは「その時代の作品をありのまま保存する」という考え方で収集された千数百点にのぼるコレクションであり、この膨大な作品調査のなかからこれらの戦争画が確認されたということが研究の始まりだった。また、この戦時下の絵画研究の当初より、当時の作家の動向などの資料をご提供いただいた栃木県美術館の学芸課長の小勝禮子氏、また、さまざまな戦時下の作家の貴重な資料等をご呈示いただき、貴重なアドバイスを頂きました大阪大学大学院、文学研究室准教授の北原恵氏、さらに東京江東区の東京大空襲・戦災資料センター館長の早乙女勝元氏には、写真資料に加え、プロの画家だけでなく、さまざまな方々が描いた絵画資料の重要性など、貴重なお話を賜った。さらに東京文化財研究所の犬塚将英氏のご協力により、非常に精度のある X 線撮影が実現し画像に関する著しい研究成果を得るに至った。そして、この研究に並々ならぬ興味をもっていただき、幾度もコラム「歴史迷宮解」にこの作品と研究を掲載、広くこの作品と歴史の出来事を世に中に発信してください、加えて多くの資料をご提供いただきました、毎日新聞社編集局学芸部 編集委員の佐々木泰造氏、ここに皆様感謝と尊敬の意を表したい。

Tokyo Conservation 修復室